



▲たくさんの子どもに笑顔を与えた綿菓子。



▲復興を願い、市の木である桜を被災者と共に植樹した。



▲派遣隊長を務めた大園良一さん。発起人でもある。

市民団体 チーム

小林 47

「直接被災地に焼肉を届けよう」をテーマに結成。47は全国（47都道府県）はひとつ、の意。

救 援 つばさ の翼 21

新燃岳噴火を契機に、ボランティアセンター設置支援、避難受け入れなどを目的として設立。



▲NPO 法人エコワールドきりしま代表藤元隆さん。救援の翼21の事務局長を務めている。



▲「3回断っても誘われたら頂く。」避難所から振舞われた昼食。

口蹄疫、新燃岳噴火に対する全国からの支援を忘れない。焼肉で被災地の復興を応援

市民団体 チーム 小林 47

派遣隊員
大園良一、吉村真一、宮原義久、丸山裕二郎、森高昭一、松田利幸、徳永祐司、前田隆博、押領司剛、横山文仁、大山薫子、大山三奈

(チーム関東)
盛永洋、小野浩、吉村繁、梅田繁代

(チーム東海)
大園政伍、夏目幹史、今別府武訓、中谷 秀

月刊「霧島中央新聞」4月号に「口蹄疫・鳥インフル・新燃岳噴火災害への全国からの支援に感謝し、焼肉を被災地に直接届けよう！」と呼びかける記事が載った。発行しているのは大園良一さん。被災地の宮城県在住で、ボランティア活動を行う旧友からのSOSがきっかけだった。支援の輪は瞬く間に広がった。同級生や恩師など会員約80人が呼びかけた。募金は350万円を超え、目標を達成。焼肉の食材や資材、焼酎も提供され、大園さんは「復興を願う強い

思いと絆を感じた」という。4月29日、大園さんを隊長に、市民団体チーム小林47のメンバー12人が4トトラックなど車両3台で出発。27時間後、仙台市に到着した。関東や東海地方から小林西諸出身者も駆けつけ、現地のボランティアグループと合流。4日間の活動内容を確認した。活動は、1日の石巻市湊小から始まる。約200人が避難所生活を送っていたが、噂を聞きつけ千人が並んだ。2日は鮎川町。避難所の管理者に許可を得て、被災者に焼肉と焼酎を

振る舞った。「辛かったことを忘れ、花見を」と呼びかけ、共に花見を楽しんだ。3日の石巻市の森林公園、4日の気仙沼市まで、活動を展開した。隊員である細野青年団のメンバーが持つて行った綿菓子は大人気。子どもから大人までを笑顔にした。「2ヶ月ぶりに孫の笑顔を見た」と涙ぐむおばあちゃんもいた。4日間、被災地5ヶ所を駆け回り、焼肉とともに元氣と笑顔を届けた。5月14日、小林中央公民館で活動報告会が開かれた。写真展示や、隊員の感想が

発表された。「心からの、ありがたうを聞き涙が出た」、「一生懸命頑張っている子どもたちの姿が忘れられない」という話から、活動の充実ぶりがかがえた。最後に大園隊長は「小林西諸の方々の気持ちを届けてきた。命や家族、地域の絆の大切さを学んだ」と話した。

今後は、残った募金を被災地で活動するボランティアネットワークの支援に使うことにしている。多くの笑顔を生んだチーム小林47は、今後も継続して支援を展開していく予定だ。

5月1日、NPO法人エコワールドきりしま代表の藤元隆さんをはじめとする11人が車両3台で被災地へ向かった。チーム名は救援の翼21。メンバーは県内の大学生などの有志だ。藤元さんは震災後、NPO法人宮崎災害ボランティアセンターの会合に出席した。宮城県南三陸町で活動する国境なき医師団が、仮設避難所の畳を必要としているという。そこで、寄付された畳100枚を現地へ届ける計画を立てた。30時間後の2日の夕方、国境なき医師団のベ-

スキャンプがある宮城県栗原市に着いた。翌朝、南三陸町へ。仮設避難所が建設されているのは、歌津地区の公民館の隣だった。高台にあり津波を免れた公民館には、約80名が避難生活を送り、子どもが勉強できる空間はなかった。そこで、隣に避難所が建設されることになった。畳を無事に届けると、避難所の方から昼食に誘われた。藤元さんは「避難所の物資を頂くと、その分減ってしまうので」と断った。しかし、何度断っても誘われ、根負けした。メニュー

はパスタ。被災者と共にする食事は、現状やニーズを把握できただけでなく心の交流ができた有意義なものとなった。午後は支援物資の分類作業。物資も、的確に分類しなければ、被災者に届くまでに時間がかかる。現地の人材不足を実感した。翌日、石巻市へ。小林市出身で、通所介護などを行っている井上光さんに会うためだ。口蹄疫が猛威を振るう中、井上さんはふるさと小林市に寄付をしていた。それを知り、藤元さんは恩返しできればと足

を運んだのだ。井上さんの施設は津波に流されていた。井上さんの願いは利用者のために施設を再開することだった。藤元さんは、この時次の活動を決めた。井上さんの介護施設再開だ。帰郷し、すぐに支援を呼びかける活動を始めた。6月上旬には、再び東北へ向かうという。藤元さんは「被災地へ応援の気持ちを届けると同時に、被災地から学ぶことが大切」と話す。「この経験やノウハウを伝え、地域を守る人材を育てたい」と報告会などを行っている。

「災害から何を学ぶか。」包括的・長期的支援を通したノウハウ、人材の育成も視野

NPO 法人 エコワールドきりしま 救援の翼 21

チーム小林47への後方支援も救援の翼21が被災地支援の計画を立てている同時期、チーム小林47が始動しようとしていた。救援の翼21では、独自のネットワークをフル活用。特定非営利活動団体リバーシブル日向の協力を得て、焼肉用の木炭47袋を調達した。

(下) 井上さんの施設では、迅速な避難によって全員無事だった。徹底した訓練の成果だ。



▼見送りをしてくれた避難所の方々。一連の活動がお互いの距離を近づけた。

